
ふるさと景観再生の手引き

～岩手県沿岸地域復興に向けた景観形成の基本的考え方～

平成24年9月

岩手県 県土整備部 都市計画課

目 次

I	はじめに	1
II	景観形成による復興に向けて目指す姿	2
III	復興と共に良好な景観を形成していくために	2
IV	復興に取り組む際に考慮すべき基本的考え方	3
V	景観形成の手がかり	4
1	自然を読む	4
1)	地形を読む	
2)	眺望を読む	
3)	気象条件・地域風景を読む	
2	歴史を読む	6
1)	まちの骨格を読む	
2)	場所の記憶を読む	
3)	伝統行事を読む	
3	将来の計画を読む	7
1)	復興計画等を読む	
2)	総合計画、都市の計画等を読む	
4	地域の文脈に従う	8
1)	自然に寄り添う	
2)	歴史を継承する	
3)	生活を継承する	
5	まとまりを意識する	10
1)	コンパクトな市街地・集落を形成する	
2)	地域に根ざした基調となる要素を見つける	
3)	近隣との調和を図る	
6	総合的に計画する	12
1)	復興の初期段階から景観に配慮する	
2)	基盤整備と建築整備を一体的に検討する	
3)	地域固有の特性を尊重した景観の演出	
4)	防災文化の定着と継承を進める	

VI 地域毎の景観形成の配慮事項	14
1 海岸部における配慮事項	14
1) 海岸線を守る	
2) 防潮林を再生する	
3) 産業空間の賑わいを演出する	
4) 眺めの良い場所をつくる	
2 市街地における配慮事項	18
1) コンパクトな市街地を形成する	
2) まちの骨格を継承する	
3) 中心市街地を再生する	
3 集落部における配慮事項	20
1) 地形に寄り添う	
2) 地域のつながりを守る	
3) 伝統文化に学ぶ	
4 高台の新住宅地における景観形成	22
1) 地域性を見出す	
2) “めりはり”をつける	
3) 日常的に親しまれる施設をつくる	
<参考>ふるさと景観再生の手引きの構成	24

I はじめに

平成23年3月11日に発生した東日本大震災では、数百年に一度と言われる大津波により、豊かな自然や歴史的風土、産業と調和して築かれていた岩手県沿岸部の市街地や集落の良好な景観の多くが一瞬にして破壊されてしまいました。

被災地では、現在、復興に向けてさまざまな取組みが進められています。

復興まちづくりの現場では、早期の生活再建や生業(なりわい)の再生などが最優先の課題とされる中で、景観への配慮に対する余裕が少ないというのが実情となっています。

各市町村が策定した復興計画の中においても、景観形成に関する取組みや景観の重要性について言及しているものは多くありません。

また、戦災復興などをはじめとした過去の復興の例を振り返ると、歴史を刻んだ街の骨格を引き継がぬままに市街地を更新したところ、良好な都市空間の資産形成（景観形成）に失敗している事例も見受けられます。

景観への配慮が少なく画一的な設計思想の下にできあがった街では、大きく変わってしまった景観を前にして、失われたものの重要性について改めて気づくということも起きています。

岩手県では、良好な景観形成の取組みとして、平成5年度から独自条例を制定し、その推進に努めるとともに、平成23年度からは景観法に基づく岩手県景観計画を制定し推進を図っています。

ふるさとの景観を守り育てることと、新たに良好な景観を築き上げていくことは、地域に愛着を持つための重要な要素の一つであり、東日本大震災津波からの復興に際しても、配慮すべき重要な視点の一つであると考えます。

II 景観形成による復興に向けて目指す姿

岩手県沿岸部は、過去にもたび重なる津波の被害から復興し、美しいふるさとの景観を創り上げてきました。

この度の東日本大震災津波からの復興においても、それを新たに創り上げていくこととなります。

今回の復興では、先人から受け継いだ自然や歴史的風土に、語り継がれるべき歴史を書き加えるとともに、子孫へと引き継ぐ良好な景観形成を併せて進めていくべきと考えます。

沿岸市町村で策定している復興計画の中では、景観形成を重要な戦略の一つとして位置づけているものもあります。

本書では、それらも参考に岩手県景観計画を踏まえながら、景観形成による復興に向けての目指す姿を次のとおりとします。

良好な景観形成による誇りと愛着を持てる“ふるさと”の再生

さまざまな復興の取組みの一つとして、景観へも配慮したまちづくりにより、被災された方々が「ふるさとに住み続けたい」と考え、地域に暮らす人々が身の周りの景観を美しく魅力あるものとして感じる“ふるさと”として復興を果たすとともに、復興に携わった人々も美しく親しみのある「まち」と実感できるような、地域に誇りと愛着を持てる社会の実現を目指します。

III 復興と共に良好な景観を形成していくために

以前の良好な景観を喪失してしまった被災地では、新たな景観を手探りで創造していかなければなりません。

このような状況の中、復興まちづくりを計画する段階にあたり、さまざまな制約条件がある中で良好な景観形成に取り組んでいくためには、次の課題を解決する必要があります。

- ① 市町村のみならず、国、県、事業者及び県民が復興に取り組む際に考慮すべき、良好な景観形成の基本的考え方が必要
- ② 市街地等復興の取組みに合わせた景観形成の手がかり（地域の特徴）が必要
- ③ 優先的に取り組むべき地域景観への配慮事項が必要

本書は、これらの課題を解決するため、岩手県内沿岸部の市町村や関係者が、東日本大震災津波からの復興まちづくりを進める上で、早い段階から景観の視点を含めた検討の際の参考とする手がかりとなるものやどのような点に留意し配慮していけば良いかなどを、本県沿岸部の自然環境や歴史・文化・風土などの特徴を踏まえながら取りまとめたものです。

IV 復興に取り組む際に考慮すべき基本的考え方

岩手県景観計画にも掲げられているとおり、良好な景観は、国、県、市町村等の行政だけでなく、事業者及び県民による連携・協働の下、積極的な取り組みや行為によって形成されていくものです。

復興においても、それぞれが同じ方向性や将来像を目指して取り組まなければ、再建した街に不釣り合いな景観が生まれてしまいます。

そのことから、良好な景観を形成していくために、取り組みや行為を行うすべての方が強く意識し、計画を実践する際に配慮されるべき事項を“基本的考え方”として次に示します。

- ① 岩手の豊かで美しい山、川、海によって形成された自然との共生に努める
- ② 日常生活の中の身近な環境において、活力と潤いを感じることでできる景観の形成に努める
- ③ これまで培ってきた地域の歴史と文化を継承し、将来にも繋げていくことができる景観の形成に努める
- ④ 全国いたるところにある画一的な街並みではなく、岩手らしさ、岩手ならではの特徴を有する自然や景観などに配慮し、周囲との調和に努める

V 景観形成の手がかり

ふるさとの景観は、前項で示した「自然との共生」や「周囲との調和」といった基本的な考えに則って、計画地の特徴をつかむこと、そしてその場所にふさわしいものとなるように計画することが重要です。

ここでは、沿岸地域において失われた景観を取り戻す、あるいは新たな景観を創造する際に共通する手がかりを、「自然を読む」「歴史を読む」「将来の計画を読む」「地域の文脈に従う」「まとまりを意識する」「総合的に計画する」という6つの項目に分けて示します。

1 自然を読む

岩手県東日本大震災津波復興計画復興基本計画の中に、目指す姿として「いのちを守り 海と大地と共に生きる ふるさと岩手・三陸の創造」と掲げられているとおり、海と大地が形づくる雄大で美しい自然と共存していくために、自然の造形に逆らわず調和を図ることが重要となります。

1) 地形を読む

北山崎などを始めとした、本県沿岸部における変化に富んだ複雑な形状の海岸線や雄大な断崖は、国立公園にも指定されている日本を代表する素晴らしい景観となっています。

大きな自然の中では、遠くの山並みから身近な里山までが一つの風景を構成する要素となっているため、計画地周辺の地形の形態的な特徴や緑の広がり、「漁師が目印にしている岬」といった地域の方々の生活の中で意味のある地形などについて、事前に確認しておくことが重要です。

◎美しい断崖（田野畑村 北山崎）【写真】

その他に

- ・美しい砂浜海岸（野田村 十府ヶ浦）
- ・ " （陸前高田市 高田松原）
- ・漁師の目印になる岩場（普代村 白井漁港）

なども



2) 眺望を読む

沿岸部には、古くから岩手を代表とする観光地や名勝と言われるような箇所、日常生活の中で住民からも親しまれている箇所が多数存在します。

また、そのような箇所を眺める視点場も、展望施設だけでなく道路や駅などさまざまな場所があります。

そのため、復興事業計画地がこのような眺望景観に影響を及ぼす場所であるか、この計画地がどのように見えるのかを事前に確認しておくことが重要です。

また、漁業を営む集落では、海が見える場所が住宅を再建する際の一つの要素となるように、計画地や視点場からどのように見えるのかが重要な事項となります。

◎山頂からの眺望（陸前高田市 箱根山）【写真】

その他に

- ・ 山頂からの眺望（大槌町 鯨山）
- ・ " （宮古市 月山）
- ・ 道路からの眺望（野田村 国道45号十府ヶ浦パーキング）
なども



3) 気象条件・地域風景を読む

海岸沿いの気象条件も景観に大きな影響を及ぼす要素となります。

例えば、日当たりの良い南斜面に集まって形成された集落や風を避けるために植えられた屋敷林などは、自然と共生する知恵によるものです。

これまでの風景を参考に、計画地周辺の気象条件・地域風景の特徴を確認しておくことが重要です。

◎山斜面からの風を防ぐ石垣 （大船渡市 泊地区）【写真】

その他に

- ・ 風を防ぐ屋敷林（エグネ・イグネ）
なども



2 歴史を読む

津波によって多くのものが失われてしまいましたが、地域の中で築き上げられてきた歴史は、復興を行う街への愛着の源(みなもと)であり、新たな景観を創造していく上で大きな手かかりとなるものです。

1) まちの骨格を読む

歴史を伝える建造物の中には、津波によって流されずにそのまま残っているものもあります。

そのような建物は、文化財等の指定の有無にかかわらず、復興まちづくりの際に失われることがないように把握しておくことが重要です。

また、建物が失われてしまった場合でも、江戸時代から残る街道やかつての目抜き通り、海や山へと視線が抜ける通りなど、まちの骨格であった街路は、歴史を伝える大切な材料として確認しておく必要があります。

◎宮古中心部～鯨ヶ崎を連絡するかつての街道(鯨ヶ崎道)

(宮古市 鯨ヶ崎地区)【写真】



その他に

- ・町の中心にある愛宕大鳥居(野田村 中心部)
- ・町の骨格となる駅(田野畑村 田野畑駅)

なども

2) 場所の記憶を読む

文化的に価値のある建物には、たとえ失われてしまったとしてもかつての繁栄した時代とのつながりが残されています。

また、かつての街を象徴する建物などには、皆が「懐かしくてたまらない」と口にするような思い出や歴史があります。

このような語り継ぐべき歴史や住んでいた人にとって価値のある場所といった記憶(背景や周辺の状況)を確認しておくことも重要です。

◎県指定有形文化財の吉田家住宅

(陸前高田市 気仙町)【写真】



その他に

- ・人形劇のモデルになった蓬莱島(大槌町)

なども

3) 伝統行事を読む

場所の記憶と同じように、街の形や景観をつくる要素として季節の祭礼などの伝統行事があります。

浸水域の外側に配置されていることが多い神社等は街の防災を考える上で重要なヒントになるほか、神社等を起点に練り歩く御神輿や山車の経路は集落などにとって重要な場所を把握することができるヒントにもなります。

また、黒森神楽や鶴鳥神楽などのように沿岸を廻る伝統行事も近隣の集落同士とのつながりを把握する上でのヒントになることから、これらの確認をしておくことも重要です。

◎けんか七夕の山車（陸前高田市）【写真】

その他に

- ・重要無形民俗文化財である吉浜のスネカ
(大船渡市 吉浜)
- ・無形民俗文化財である釜石虎舞（釜石市）
なども



3 将来の計画を読む

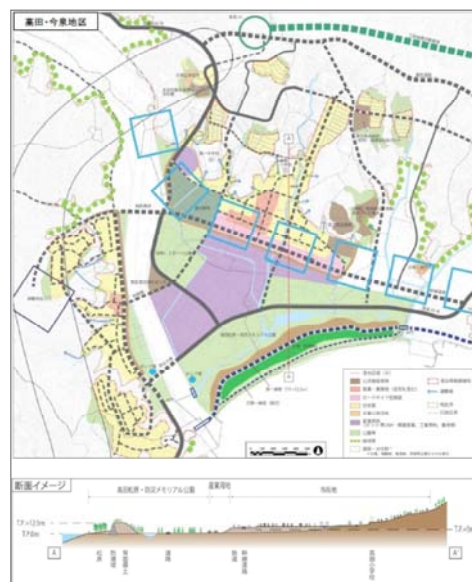
復興事業計画地が今後どのような場所になるのかという計画は、歴史と同様に新たな景観を創造していく上で大きな手がかりとなるものです。

1) 復興計画等を読む

復興事業計画地が住宅地なのか、あるいは賑わいを求める産業エリアなのかによって目指す景観も大きく異なります。

被災地で事業を計画する際には各市町村の復興計画を参考に、計画地の位置付けなどを確認しておくことが重要です。

◎陸前高田市震災復興計画



2) 総合計画、都市の計画等を読む

復興を行っている街には、これまでに策定されてきた自治体の総合計画、都市の骨格を定めた都市計画マスタープラン、岩手県全体の景観の方向性を定めた岩手県景観計画などがあります。

これらの計画は、街の今後のあるべき姿を示しており、地域景観の方向性にも関わることから、これらの計画を把握しておくことが重要です。

4 地域の文脈に従う

計画地がどのような場所なのか、周りからどう見えるのかを意識することが景観への手がかりの第一歩です。

住民の記憶も含めた街の文脈（背景や周辺の状況）を丁寧に読み取って、まちづくりに反映していくことが重要となります。

1) 自然に寄り添う

沿岸地域の景観の基本となる自然を大きく改変することは、復興まちづくりにおいて望ましいものではありません。

名勝に近い場所で開発を行う場合には、極力自然の中に溶け込むように、斜面等を新たな居住地とする場合には、地形に沿った自然の配置となるように、住宅を再建する場合には、周辺の「三陸らしい」住宅等の建て方を見習うように、これまで育んできた自然との共生に配慮した計画とすることが重要です。

◎斜面に沿った集落（釜石市唐丹 小白浜地区）【写真】

その他に

- ・斜面に沿った集落（大船渡市 綾里地区、吉浜地区）
- ・ " （大槌町 吉里吉里地区）
なども



2) 歴史を継承する

津波で多くの建物等が失われてしまっても、まちの歴史そのものが消えてしまった訳ではありません。

残った資源を保存するだけでなく、皆の大事な記憶の上に新たなシンボルを創造すること、市街地が大きく縮小する場合には以前のまちの中心を再建すること、土地を嵩上げする場合であっても以前の道路の形や特定の場所を大事に扱うことなどのように、復興事業計画地の歴史を考慮して継承することが重要です。

◎町の中心にある愛宕大鳥居（野田村）【写真】

その他に

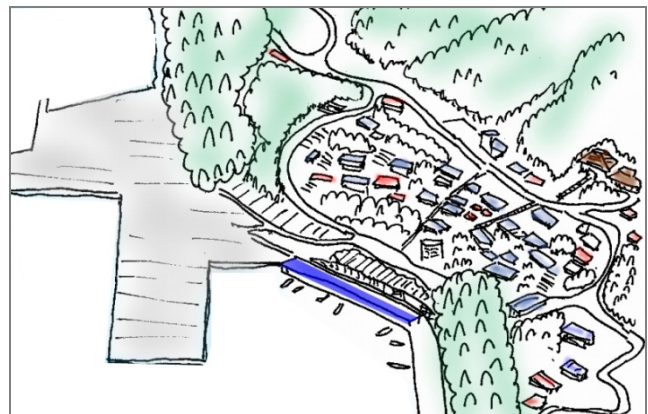
- ・ 町の中心にあった御社地（大槌町）
なども



3) 生活を継承する

地域の景観は、そこに住む人々が長年に渡り築きあげてきたものです。

これからもそこで生きていく人たちが、安心して、楽しみながら、意欲を持って生活をするためにも、住む人々の生活の様子、地域の行事の中心となる空間、公共施設の位置などに留意して、これまでの生活の継承を考慮することが重要です。



5 まとまりを意識する

景観は、建物単体のデザインの質ではなく、複数の建物や外構、街路等が一体となった“まちなみ”やその境界の魅力により創出されます。

多くの建物が一斉に建て替わる今回のようなケースにおいては、近隣を意識して計画することで、被災前よりも優れた景観を目指すことができます。

1) コンパクトな市街地・集落を形成する

沿岸部の市街地や集落は、海や山に囲まれた“コンパクトなまち”が形成されていました。

“コンパクトなまち”は歩きやすく、街の構造も認識しやすいため、景観としても魅力的なものとなります。

人口減少時代を迎えた今、かつての姿へ回帰することが本当に望ましいか検討することも重要です。

また、一部住宅地が離れた場所に移転する場合には、視覚的なつながりを保つために建築物の色や素材など共通のデザインによる景観的なつながりを考えることが重要です。

◎コンパクトに形成された街

(大船渡市 吉浜地区)【写真】

その他に

- ・ 漁業者がまとまって居住する地区
(宮古市 鍛ヶ崎地区)
なども



2) 地域に根ざした基調となる要素を見つける

魅力的な街並みやその境界には、どこかに地域性を感じさせる統一感があるものです。

岩手県沿岸部によく見られる宅地まわりの石積みや生け垣、地場の素材を用いた建物、気仙大工などの伝統技術を活かした建築物など地域の基調となる要素を生かした計画とすることが重要です。

◎地場産による石垣

(大船渡市 吉浜地区)【写真】

その他に

- ・ 気仙大工などにより軒先を大きく出す工法（船がいせがい造り）によって建てられた民家
(岩手県沿岸南部)
なども



3) 近隣との調和を図る

建物を建築する際には、高さが大きく異なる建物が並ばないように配慮すること、建物の向きや道路との関係がばらばらにならないように配慮すること、極端に鮮やかな色や色調の異なる素材を使わないよう配慮することなど、近隣と協調した計画とすることが重要です。

ただし、あまりにも画一的な街並みは、つくり物のような印象を与えることがあるため注意が必要です。

その際には、生け垣等の植栽を用いて、変化や個性を出すことも一つの対応策となります。

植栽には、異なる外観、工場と住宅など異なる土地利用の衝突、工場の設備機器の圧迫感や騒音などを緩和する効果もあります。

また、海岸を走る道路の風景が行政界を境に急変してしまうというのは好ましくありません。主要な道路では、街並みをできるだけ統一したり、協調を図ることにより、美しく連続した沿道景観を生み出すことができます。

◎生け垣や庭木による変化の演出

(大船渡市 綾里地区) 【写真】



6 総合的に計画する

復興まちづくりは、宅地造成や基盤整備などさまざまな段階を経て進められますが、各段階での景観面の配慮の仕方次第で表面的な化粧に留まる場合もあれば、すぐれた景観を得られる場合もあります。

良好な景観形成を進める上でも、表面化粧やデザインの問題だけにするのではなく、住んでいる人の生活空間をどのように考えるかを出発点を持つことが重要です。

どの段階で何を検討をするかによって、その結果が大きく異なることから、復興計画を作成する段階から次のような手がかりを参考に、良好な景観の形成を目指すことが重要です。

1) 復興の初期段階から景観に配慮する

復興まちづくりは、大規模な基盤整備を伴うものが多く、その設計の時点から計画地のイメージが規定されていくことが予想されます。

このことから、計画初期の段階で住民の方々の参加を極力取り入れて、地域の文脈を捉えることや、住民の生活など、全体のまとまりを意識した復興整備計画の検討を行うことが重要です。

また、大きな法面を発生させない地形に沿った街区設計や電線類の裏配線などの景観に対する配慮を行っていく場合にも、復興の初期段階から計画に取り入れていくことが重要です。

◎初期段階から景観に配慮された住宅地

(陸前高田市 鳴石団地)【写真】



2) 基盤整備と建築を一体的に検討する

歩いて楽しい街並みの演出を行うには、緩やかな曲線を描く道路、地域の特徴を活かしながら人々が集える場所の計画、建物のセットバックによるゆとりのある配置など、建築と基盤整備を一体的に検討することで、場所毎の特徴の演出や魅力の向上を図ることが重要です。

◎道路と建物を一体的に空間演出する

(陸前高田市 鳴石団地)【写真】



3) 地域固有の特性を尊重した景観の演出

良好な景観は、地域固有の特性と密接に結びついているものであることから、その地域を代表するような特性を活かした景観演出も必要です。

しかし、建物等の外観については、極端に奇抜な形状にすると、わざとらしい印象を与えてしまい、かえって景観を損なうものになりかねません。

また、大規模な法面全般への擬石の使用、地域に似つかわしくない外国のコピーのような街並みの再現、規模や形状が過剰である屋外広告物の設置などは避けることが重要です。

4) 防災文化の定着と継承を進める

今回の津波被害を後世に伝えることが今後の防災対策において重要であり、復興に向けた景観形成の重要な役割となります。

釜石市唐丹町本郷地区では、復興への願いを込めた桜が移転に伴い付け替えられた高台の道路に沿って植えられています。桜並木は桜の季節には観光スポットになるほどの美しい景観をつくと同時に、災害の記憶の分かりやすい目印にもなり、地域の防災文化が景観として表れている結果と言えます。

また今後は、高齢化社会という大きな社会の変化を迎えることから、安全な避難路を設けるなど、安全安心の社会基盤施設を構築することも防災文化が反映された景観形成につながると考えられます。

このように復興まちづくりの中で災害の記憶を伝える方策を検討することが重要であり、これが地域固有の景観にも繋がることになります。

◎津波からの復興の願いが込められた桜の植樹

(釜石市唐丹町 本郷地区)【写真】

その他に

- ・災害の記憶を伝える「両石津波記念碑」
(釜石市 両石地区)
- ・災害の記憶を伝える「大津波記念碑」
(宮古市 重茂地区)
なども



VI 地域毎の景観形成の配慮事項

入り組んだ海岸線や雄大な断崖、美しい砂浜のほか、人々の生活や生業(なりかい)を支えてきた活気あふれる港湾や漁港の姿は、岩手県沿岸部を代表する景観となっています。

また、復興により再建される市街地や漁村などの集落部、被災された住居の移転先として整備される高台の住宅地などは、新たな景観の創出がなされることとなります。

沿岸12市町村で示された復興パターンをもとに、海岸部、市街地、集落部、高台の新住宅地に分類し、それぞれの場所や地形に応じた景観形成の配慮事項を示します。

1 海岸部における配慮事項

海岸部の景観は、住民の生活と密接な関係があるとともに、優れた観光資源でもあり、復興に向けた景観形成においても重要な要素となっています。

1) 海岸線を守る

津波による被害を受けた沿岸部は、陸中海岸国立公園に指定されており、今後も豊かな自然と複雑な地形を誇る海岸線の景観を残すことへの配慮が必要です。

この景観を守っていくには、海岸線、島々の連なり、航海上のランドマークとしての岬などに対して、景観を乱すような地形の改変、樹木の伐採、人工物の設置などを控えることが重要です。

特に、陸側、海側からの主要な眺望点からの景観には配慮が必要で、人工物を海岸近くに設置する場合には、材質や仕上げ等を考慮して周辺の自然景観と調和を図る必要があります。

また、自然海岸や景勝地の周辺では、人工物はできる限り海岸線から後退した位置に配置することが重要で、灯台などの施設を再建する場合には、海岸線と調和しながらも観光資源にふさわしいデザインとすることが必要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・宮古市の浄土ヶ浜は、松の緑と岩肌の白、海の群青のコントラストが映える陸中海岸国立公園の代表的な景観資源です。
- ・田野畑村の北山崎の美しい断崖景観は重要な景観資源です。
- ・県南部の唐丹湾などは、入り江が複雑に入り組み非常に美しい景観を生み出しています。
- ・陸前高田市の高田松原、野田村の十府ヶ浦など海洋型レクリエーション拠点になっている砂浜海岸も貴重な景観資源です。



◎美しい海岸景観

(宮古市 浄土ヶ浜)

2) 防潮林を再生する

海と市街地あるいは海と集落部の間に位置する防潮林は、海岸部を象徴する景観の要素の一つです。

今回の津波では、多くの場所で防潮林が流されてしまいましたが、平時には飛砂や塩害を防ぐという重要な役割を果たしており、自然と共生する知恵に基づくこうした景観を後世に伝えることが求められます。

高田松原の再生と防災メモリアル公園ゾーンを核としたメモリアルグリーンベルトの創出を掲げる陸前高田市をはじめとして、津波による被害の大きかった多くのまちで、居住地と海との間に公園や防潮林等の緩衝帯を設けることが検討されています。

緑を提供することができる防潮林は、人工的な工作物とは違った景観を形成することができることから、配慮する上で重要な要素であると考えます。

防潮林の再生に取り組む際には、岩手県でよく用いられる南部アカマツなどにより行い、その背後にある山のカラマツ林やスギ林など、産業と一体になった植生景観も併せて守っていくことが大切です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・釜石市の根浜海岸や、大船渡市の碁石海岸にある南部アカマツの防潮林は、岩手らしさを代表する景観です。



◎アカマツ林が美しい海岸線
(釜石市 根浜海岸)

3) 産業空間の賑わいを演出する

海は、沿岸の人々の生活や生業(なりわい)を支えてきた貴重な資源であり、活気あふれる港湾や漁港は、雄大な自然景観と共に海岸部を象徴する景観となっています。

産業の復興と並行して、観光にも配慮した賑わいの空間の形成を進めることが求められます。

また、海を背景とした人や物のダイナミックな動きが港湾や漁港の景観の魅力を醸し出しています。

このことから、市街地に住む人や観光客がアクセスしやすく、地域にあった道路幅員や地形なりの道路となるよう工夫して、港湾部と市街地との連続性を確保することが重要となります。

また、人々が親しめる場として市場や広場等を整備し、街灯や植栽の設置場所を工夫することによる潤いのある景観を創出することが重要です。

さらに、養殖いかだが海に浮かぶ景観は、海岸部の魅力の一つであることから、海を眺望できる視点場を確保することも重要であり、これら海を背景とした、港湾や漁港の景観を守り育むことも大切です。

そして、海岸沿いに立地する港湾施設や漁業関連施設、道路、護岸等の公共施設等は、対岸や海からの眺めの対象となることから、景観阻害要因とならないよう配慮し、背景となる緑や岩肌などの自然と調和を図ることも重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・大船渡市の大船渡港や、普代村の太田名部漁港などにおいての水揚げは、活気があふれ、賑わいのある沿岸部特有の生業(なりわい)の景観です。
- ・山田町の山田湾に浮かぶ養殖いかだも、岩手県沿岸を代表する産業の景観です。



◎賑わう港(普代村 太田名部)

4) 眺めの良い場所をつくる

津波による浸水域から居住地が後退することや大きな緩衝帯が新たに設けられることによって、ふるさとの美しい海を見る機会が減少します。

公園や道路等を活用した高台の展望スポットの整備、海まで見通せる街並みの計画、優れた景観の散策路の整備など、震災前以上に海と市街地全体を俯瞰する場を積極的につくり出すことも重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・ 普代村の黒崎、田野畑村の北山崎などには断崖を展望する場所が備わっています。
- ・ 釜石湾や唐丹湾などは、美しい海と岬で形成される入り江の景観が特徴的です。
- ・ 海岸へとつづく“こみち”が各市町村の随所にあり、ここから海を眺めることができます。



◎海へ通じる“こみち”

(釜石市 大石地区)

2 市街地における配慮事項

産業機能や商業機能が集積する市街地では、産業施設を海側に配置し、中心部には土地の嵩上げなどを行った上で、商業施設や公共施設などを配置することが復興計画の概ね共通する方向性となっています。

ここでは、被災による人口減少の加速など、社会的課題を多く抱えながらも、「まちの顔」として、元気で賑わいのある景観形成が求められる市街地での配慮事項を示します。

1) コンパクトな市街地を形成する

被災した市街地の多くは、浸水域の一部が緑地・公園等となるため、市街地全体が山側へと後退することになります。しかし、後退することは斜面の造成や市街地の拡散につながることから、あまり景観上好ましいこととは言えません。

将来を考えた市街地の形成としては、人口減少社会におけるコンパクトな市街地が求められている今、海岸部の埋め立てや市街地の拡大が起こる以前のまちの姿を参考にするとともに、歴史的に津波を免れている場所や街道沿いの賑わいといった過去の歴史を取り込んだ景観形成が重要です。

また、お年寄りなどが車を使わず、歩いて暮らせるまちを目指すことも必要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・野田村の中心市街地や、岩泉町小本地区、大槌町吉里吉里地区、釜石市唐丹町小白浜地区など、歩いて暮らせるまちがあります。
- ・岩手県沿岸での漁業を生業(なりわい)とする人々の多様な生活の仕方があり、宮古市鯨ヶ崎などは、漁を営む人が一定の土地にまとまって暮らす景観を見ることが出来ます。



◎歩いて暮らせる

コンパクトなまち

(釜石市唐丹町小白浜地区)

2) まちの骨格を継承する

市街地は、津波で多くの建物等が失われてしまっても街すべてが消えてしまった訳ではありません。かつての目抜き通り、江戸時代から残る街道、海や山へと視線が抜ける通りなど、骨格となる道路は、ふるさとの景観を形成する手がかりとなることから、このようなまちの骨格を大切にして、将来に継承していくことが重要です。

新たに区画整理や土地の嵩上げを行う場合でも、こうしたまちの骨格を下に計画し、住民の大切な記憶を丁寧に掘り起こしながら、場所の記憶を顕在化させる取組みが重要です。

津波の被害を免れたり被害が軽微だった建物等は、歴史を表す手がかりとなることから、復興まちづくりの中で活用を模索することが重要です。

移転や嵩上げを実施するためにやむを得ず取り壊さなければならない場合でも、歴史的に重要な建物等についてはその記録を保存することなどが重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・大槌町御社地や野田村城内地区などは、旧来から続く街区の骨格が残っています。



◎町の中心にある愛宕大鳥居
(野田村 中心部)

3) 中心市街地を再生する

市街地では、周辺地域の中でも中心的な位置付けにある商業地域の多くが被災し、復興にあたっては区画整理等が計画されていることから、これらの整備とあわせて、従前からの課題である賑わいを生み出す景観づくりを計画的に進めることが望めます。

また、中心市街地の賑わいを多面的に検討することによって、まちの再生を促すことも重要です。

例えば、駅前広場や横丁などの人が集える空間などを確保し、水辺や街路樹などによる水と緑のネットワーク形成や電線類の地中化又は裏配線など、景観形成を意識した整備が重要です。



◎中心市街地活性化の拠点
(釜石市 青葉通り)

3 集落部における配慮事項

漁港や田畑を中心に形成された沿岸の集落では、海側に漁業関連施設や農地を配置し、山側に住宅地を確保するというのが復興計画の概ね共通する方向性となっています。

沿岸の小規模な漁村集落では将来の地域の担い手である若者が市街地へ流出し、基幹産業である漁業経営が厳しさを増すなど大きな課題を抱えています。

しかし、沿岸の集落部は、三陸の豊かな漁場を背景とした親しみやすい文化や風習を今でも多く残す、沿岸の“ふるさと”ともいえる景観を持つ地域でもあります。

ここではこのような特徴を持つ集落部での配慮事項を示します。

1) 地形に寄り添う

集落の中には、過去の津波により山側斜面へ移転した例が複数存在し、背景となる山辺の緑が斜面に沿った集落や漁港と一体になって美しい景観が形成されています。

斜面地への集落の移転に際しては、斜面地を平坦にして多くの宅地を確保することが必要ですが、大規模な地形の変更を伴う造成は、のどかな漁村風景に対して必ずしも適したものとは言えません。

そのため斜面地では、できる限り自然地形を利用し、工事による大規模のり面を発生させないようにするなど、景観への影響を最小限にとどめる工夫が重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・大船渡市小石浜地区、吉浜地区や釜石市唐丹町小白浜地区は斜面をうまく活用した家々が立ち並んでいます。
- ・また山田町大沢地区などでは、沢筋に家々を建てて暮らしてきた歴史があります。



◎地形に寄り添う宅地

(大船渡市 小石浜)

2) 地域のつながりを守る

集落部には、代々住み続けられてきた家や敷地が多く、永く培われてきたコミュニティや一体感のある景観が魅力となってきました。

復興にあたっては、従前の地域の基調となる要素や周囲の自然を手がかりに、建物の色彩・デザインと垣・柵等の一体性を持たせる工夫、地域に根ざした技や共通の素材を取り込む工夫などを行うことによって、景観についてまとまりのある集落地を形成することが重要です。

また、住民が集まりやすい広場の設置、顔を合わせやすい住宅の配置などにより、地域のつながりを保つ工夫を行うことも重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・沿岸南部では気仙大工の技が活かされた家々を見ることができます。
- ・まちなみにおいても、石積みや、生け垣により景観形成が行われています。



◎地域特有の瓦屋根の連続景観
(大船渡市 越喜来)

3) 伝統文化に学ぶ

祭や芸能等の行事は、それ自体が無形の景観資源であり、集落のまとまりの維持や地域の伝統や文化を継承する上で重要な役割を担っています。

復興の際には、神社等を起点に練り歩く御神輿や山車の経路、祭事が行われる地点などに留意しながら、街並み整備などによる景観形成を進めることが重要です。

また、景観への意識を集落単位での行事によって統一するだけでなく、神楽などによる沿岸の村々を回る行事を通じて異なる集落間のつながりを考慮した景観形成も重要です。

集落地域は人口流出などが懸念される地域であり、伝統文化を守っていくことが人々の絆を強くしている現状があることから、祭や芸能等に配慮していくことが重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・大船渡市吉浜地区の「スネカ」、釜石市の「虎舞」など沿岸には多くの無形の文化が存在します。
- ・普代村の鵜鳥神社や、大槌町の蓬莱島など有形で祭事を中心となっている神社仏閣を基礎にした文化もあります。



◎地域の祭事空間の中心
(普代村 鵜鳥神社)

4 高台の新住宅地における景観形成

住民が津波の心配がない高台への移転を希望する場合、既存の市街地や集落部に人口を収容しきれない場合などに、全く新しい高台等に住宅地を建設することとなります。

ここでは、このような高台の新住宅地での配慮事項を示します。

1) 地域性を見出す

既存の市街地や集落から離れた高台に移転する場合には、景観形成の手がかりを得ることが難しいことが予想されます。

従前の居住地での生活を継承するために、海が見える場所をつくる、隣地との関係が大きく変わらないよう建物の配置や向き、並びに配慮するなどの工夫が重要です。

また、新たな環境を創造するうえで、高台の緑豊かな環境にあわせた植栽などを検討することが重要です。

加えて、高台の新住宅地においては、あえて小さな街区としてコミュニティの交流促進などに配慮することなども重要です。

●岩手県沿岸に特徴の特征的景観

- ・釜石市唐丹町本郷地区は、谷や沢の地形をうまく活用して、昭和三陸津波からの高台移転を行っています。
- ・大船渡市綾里地区では、小さな街区が導入され、車が入れない歩道空間によって家々が結ばれ、コミュニティの交流に一役買っている空間もあります。
- ・陸前高田市の鳴石団地は、地域の材料をふんだんに使用し、地域性を出しています。



◎地域材をふんだんに使用した団地
(陸前高田市 鳴石団地)

2) “めりはり”をつける

建物の色彩やデザイン、垣・柵等を統一して新しい住宅地の特徴をつくることも重要ですが、画一的で人工的なまちとなってしまうことが心配されます。

公平な区画割りを意識しながらも、街路に曲線を用いたり、広場や集会所など中心的な場所の配置、また緑道の設置などにより街区構成に“めりはり”を持たせることが重要です。

また、個々の家の“めりはり”を保ちながらも、個々の敷地の広さを揃えることや、庭に植栽を行うなどにより、全体でまとまりある空間に計画することも重要です。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・陸前高田市の鳴石団地は、家々が単調に並んだ空間とならないように団地の中心に広場を設けています。
- ・大船渡市綾里地区は、家々の屋根の色や形に違いがあるにもかかわらず、全体で一つのまとまりある景観を作っています。



◎広場を設けて変化を持たせる
(陸前高田市 鳴石団地)

3) 日常的に親しまれる施設をつくる

高台を造成する際に作られる施設は、立地を活かした展望広場や小公園などのように日常的に利用される場所として整備することが重要です。

このような、日常的に利用され、普段の生活の中で違和感を与えない心配りは、高台の新住宅地へ施設を作る際にも必要と考えられ、安全と日常の快適性を両立させて、景観への配慮も行うことが重要となります。

また、昭和三陸津波を受けた際に高台へ移転した地区は、当時の土木技術が未発達であったこともありますが、地形への影響が少ない方法で造成されており、小さな街区で構成されており、景観的にも違和感なく親しまれています。

●岩手県沿岸の特徴的景観

- ・大船渡市の高台にある防災公園は、地域の方々が日常的に利用しています。



◎日常的に利用されている高台の公園
(大船渡市 明神前)

<参考>ふるさと景観再生の手引きの構成

沿岸地域の景観形成における手がかりと配慮事項において留意する点を箇条書きで示しました。

I 景観形成の手がかり		
沿岸地域の景観の読みかたと手がかりという大きな項目で整理します		
大項目	中項目	詳細項目
①自然を読む	地形	<input type="checkbox"/> 遠くの山並み、身近な里山までを一つの風景として知る <input type="checkbox"/> 漁師が目印にしている岬など場所の意味を知る
	眺望	<input type="checkbox"/> 眺望点から計画地がどのように見えるかを知る <input type="checkbox"/> 海が見えるか確認する
	気象条件・地域風景	<input type="checkbox"/> 日当たりの良い南斜面がどこか把握する <input type="checkbox"/> 風を避けるための屋敷林、石垣の工夫を知る
②歴史を読む	まちの骨格	<input type="checkbox"/> 江戸時代から残る街道を知る <input type="checkbox"/> かつての目抜き通りを把握する <input type="checkbox"/> 海や山へと視線が抜ける通りを把握する
	場所の記憶	<input type="checkbox"/> かつての繁栄した時代のつながりを知る <input type="checkbox"/> かつての街を象徴する建物を知る <input type="checkbox"/> 語り継ぐべき歴史を知る <input type="checkbox"/> 住んでいた人にとっての価値のある場所を知る
	伝統行事	<input type="checkbox"/> 浸水域の外側に立つ神社仏閣を把握する <input type="checkbox"/> 御神輿・山車のルートやお祭り会場を把握する <input type="checkbox"/> 神楽など伝統行事と集落間のつながりを知る
③将来の計画を読む	復興計画、総合計画等	<input type="checkbox"/> 復興事業計画における計画地の位置付けを知る <input type="checkbox"/> 総合計画、都市計画、景観計画等を調べる
④地域の文脈に従う	自然に寄り添う	<input type="checkbox"/> 自然の大きな改変を避ける <input type="checkbox"/> 地形に沿った自然な配置
	歴史を継承する	<input type="checkbox"/> 残った資源をできるだけ保存する <input type="checkbox"/> 皆の大事な記憶の上に新たなシンボルを創造する <input type="checkbox"/> 以前のまち、道路の形や特定の場所を大事に扱う
	生活を継承する	<input type="checkbox"/> これまでの生活の様子や公共施設の位置に留意して、生活の継承を考慮する
⑤まとまりを意識する	コンパクトな市街地形成	<input type="checkbox"/> 人口減少に合わせた“コンパクトなまち”を検討する <input type="checkbox"/> 離れた場所に移転する場合には、視覚的なつながりを保つ
	地域の基調要素を見つける	<input type="checkbox"/> 地場の素材を用いる <input type="checkbox"/> 地域性を感じさせる伝統技術を活かす
	近隣との調和	<input type="checkbox"/> 建物の向き・道路との関係・色調を調和させる <input type="checkbox"/> 主要道路沿いの統一や協調を図る
⑥総合的に計画する	復興の初期段階から	<input type="checkbox"/> 住民参加を極力取り入れて検討する <input type="checkbox"/> 全体のまとまりを意識した復興整備計画の検討を行う <input type="checkbox"/> 大きな法面を発生させない地形に沿った街区設計や電線類の裏配線などの配慮を行う
	基盤整備と建築の一体的検討	<input type="checkbox"/> 緩やかな曲線を描く道路を計画する <input type="checkbox"/> 人々が集える場所を計画する
	地域固有の特性を尊重した景観の演出	<input type="checkbox"/> 大規模な法面全般への擬石の使用、規模や形状が過剰である屋外広告物の設置などは避ける <input type="checkbox"/> 地域を代表する特性を活かした景観演出
	防災文化の定着と継承を進める	<input type="checkbox"/> 安全な避難路を設けるなど、安全安心の社会基盤施設を構築する <input type="checkbox"/> 災害の記憶を伝える景観を検討する

Ⅱ 地域毎の配慮事項

4つの地域における景観配慮事項を整理します

大項目	中項目	詳細項目
①海岸部	海岸線を守る	<input type="checkbox"/> 景観を乱すような地形の改変、樹木の伐採などを控える <input type="checkbox"/> 人工物は周辺の自然景観と調和を図る
	防潮林を再生する	<input type="checkbox"/> 緑を提供することができる防潮林により、人工的な工作物とは違った景観を形成する
	産業空間の賑わいを演出	<input type="checkbox"/> 港と市街地との連続性を確保する <input type="checkbox"/> 海を眺望できる視点場を確保する
	眺めの良い場所をつくる	<input type="checkbox"/> 高台の展望スポットを整備する <input type="checkbox"/> 海まで見通せる街並みを計画する
②市街地	コンパクトな市街地を形成する	<input type="checkbox"/> 海岸部の埋め立てや市街地の拡大が起こる以前のまちの姿を参考にする
	まちの骨格を継承する	<input type="checkbox"/> かつての目抜き通りを大切にする <input type="checkbox"/> 江戸時代からの街道を大切にする
	中心市街地を再生する	<input type="checkbox"/> 駅前広場や横丁などの人が集える空間を確保する <input type="checkbox"/> 水辺や街路樹を設ける <input type="checkbox"/> 電柱類の地中化又は裏配線などを検討する
③集落部	地形に寄り添う	<input type="checkbox"/> 斜面地では自然地形を利用し大規模のり面を発生させない
	地域のつながりを守る	<input type="checkbox"/> 建物の色彩・デザインと垣・柵等の一体性を持つよう工夫する <input type="checkbox"/> 景観についてまとまりのある集落地を形成する
	伝統文化に学ぶ	<input type="checkbox"/> 祭事が行われる場所を大切にする <input type="checkbox"/> 集落間のつながりを考慮する
④高台の新住宅地	地域性を見出す	<input type="checkbox"/> 海が見える場所を設ける <input type="checkbox"/> 高台の緑豊かな環境にあわせた植栽を行う
	“めりはり”をつける	<input type="checkbox"/> 街路に曲線を用いたり、緑道の設置などにより街区構成に“めりはり”を持たせる
	日常的に親しまれる施設をつくる	<input type="checkbox"/> 施設を作る際には、安全と日常の快適性を両立させて、景観への配慮も行う